

2026年度一般入学試験 後期日程問題

英語・数学・国語 (2科目選択)

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで問題用紙を開かないこと。
2. 2科目を選択し、解答すること。
3. 各科目の問題はつぎの順番になっている。
 - 「英語」・・・・・・・・・・ 1～4ページ
 - 「数学」・・・・・・・・・・ 5～7ページ
 - 「国語」・・・・・・(後ろから) 1～8ページ
4. 選択した2科目の解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。
5. 解答時間は2科目連続で80分である。科目の解答順、時間配分は自由とする。
(科目間の休憩は設けていない。)
6. 使用しない解答用紙等は、計算等に使用して構わない。
7. この問題用紙は持ち帰ること。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これまでみてきたように、自尊心の高さ、つまり、自尊心の高さのもつ「社会的ワクチン」^{注1}の有効性に対しては、批判的検討がある程度進んだ。

ここで見逃されがちなのが、自尊心の低さの問題である。自尊心神話に対する批判的検討の視点の多くは「自尊心が高いことが絶対的善ではない」という方向性で展開された。だが自尊心神話には、自尊心の低さを社会問題の根源とする、低い自尊心のもつ「社会的毒性」を仮定し、自尊心の低い状態を非難するという側面もあつた。この点に対する疑問、すなわち、「自尊心が低いことが悪であるのか」を問う議論はあまり展開されていない。自尊心の低さに注目することは、自尊心の議論に新たな「^a」を投じるものとなる。正直にいうと、筆者のもともとの問題意識はここにある。「自尊心の高い人はよいといわれているが本当はそんなによくはないのではないか」ということよりも、「本当はさほど矯正する必要もないのに、自尊心の低い人を矯正すべき対象としてしまっているのではないか」ということの方が深刻な問題のように思う。

我々は自分の感情をコントロールしようとすればするほど、その感情を増幅^アさせてしまう。自尊心を高めようとする働きかけによって、自尊心の低い人が自身の自尊心の低さをより強く自覚し、そして、そのような自尊心をもつ自分をさらに否定してしまう可能性が想定される。自尊心が高いか低いかというカテゴリーを新たに知ることによって、自尊心が低いという主観的基準における自己否定の問題に加え、その態度を客観的基準によって否定されるという二重否定を体験させられるということである。

また、日本の子どもの自尊心は欧米に比べて低く、しばしばその低さが問題視される（古荘, 2009; 佐藤, 2009）。だが、我が国における自尊心の議論では、「低さ」の意味を考えることが非常に重要であると筆者は考える。

自尊心の低い人の心理的世界をどう理解すればよいだろうか。

(中略) 私たちは、自己という存在から逃れることができない。「この私」として、「自己」を中核的要素とする主観的な経験世界を生きている。その枠組みの中で、各自が適応的に生きるための様式が獲得される。

その適応様式は、各自の自己とその人が生きる主観的な経験世界との関数によって異なる。A 不安定型とされる良好とはいえない親子間の愛着パターンが、別の観点からとらえると、その親子にとってのかかり合いを維持するためのものとしての機能が指摘される(遠藤・数井, 1991)。それと同様に、自尊感情が低い人は、独自の適応プロセスを発達させている可能性がある。

参考になるのが楽観主義的思考に関する知見である。物事や課題に対しした際に、その結果を信じ、自分はその結果をつくることができるという「楽観主義」の方略をとることは、実際により成績を残す上でも、さらには社会的に好まれ、周囲からの評価もよいという点でも有効である(Segerstrom, 2006; Seligman, 1990)。B、楽観的であることの価値を報告する研究は数多くみられ、いふなれば、楽観性が「善」で悲観性が「悪」であるといった二分法的な考え方も広がりつつある(外山・市原, 2008)。だが、将来の課題に対して悲観的になることで課題に対する対応策を十分に考え、その結果高いパフォーマンスを示す、つまり楽観的に考えないことによつて成績の向上につながるという方略があることも明らかにされた。ノレムとキャンター(Norem & Cantor, 1986)は、このような方略を「防衛的悲観主義(defensive pessimism)」とよんだ。防衛的悲観主義者たちは、悲観的にも「ごとをとらえるからこそよい結果を獲得しうるといふ、独自の適応方略を有しているのである。つまり、悲観主義者に焦点を当てることによつてはじめて浮き彫りにされる、楽観主義者にはない、悲観主義者特有の適応様式があることを指摘するものである。

防衛的悲観主義者のように、自尊感情の低い人がそれなりの適応様式によつて適応を維持しているならば、自尊感情を高めようとする働きかけが、自尊感情の低い人なりの適応様式を阻害してしまう可能性が想定される。もちろんそれが維持されるべきか否かは慎重に見極める必要があるが、自尊感情を高める働きかけがその人の適応様式の変更をシイ^①側面をもつということは留意すべきであろう。安田・佐藤(2000)は、楽観主義が防衛的性質を基盤とする場合があることを指摘しているが、同様のことが生じうる事態が推測される。

自己を否定的に評価すること、また、自己を肯定できないことが、どのくらいその人にとって致命的な事態であるのかについても、ギンミ^②する必要がある。

(中略) 北山・唐澤 (1995) は、日本における自己実現プロセスとして、自分の欠けている点を修正することによって自らを向上させ、関係の中で共有されている理想像へ自己を近づけようとするプロセスを指摘する。北山 (1998) は、「欧米においての自己は各人の中にある静的実体として捉えられているのに対して、日本の自己は短所の発見とそれに基づいた向上がセットになった一種の時間的変化を伴った行為として捉えられている」(p.147) と述べる。そして、これからの成長・変化というプロセスを含みこんだ上で自己がとらえられるのである。それは、「自らの過去の行為の中に問題点を見つけたし、それを改めるべく意思表示をする行為のパターン」(北山, 1998, p.147) としての「反省」の慣習を前提とするとされる。

そのような場合には自分のあり方に対する評価は否定的になる。C、自己はそこにとどまる存在だととらえられておらず、そこからよりよい存在になれると信じられている。このように、自己への否定的評価がよりよい存在になれるという自己への信頼や、実際にそうなるうとしている主体としての感覚のゆえに生じている場合には、自己への否定的評価は個人の適応を阻害するものとはならないだろう。

(中略)

他者との協調性が重視される社会においては、自尊心 (self-esteem) や自己賞賛 (self-appraisal) は、その文化で共有される価値と相容れないことがある。自己批判や自己を控えめにとらえることを推奨し、強化し、習慣的な反応傾向として内面化させるような文化がある。その文化的状況の下に示される自尊心の低さには、関係性の調節や維持という独特の機能が指摘されている。

「自尊心」を『広辞苑』でひもとくと、「自尊の気持。特に、自分の尊厳を意識・主張して、他人の干渉を排除しよう

とする心理・態度。プライド」と説明されており、何となく否定的なニュアンスが漂う。「自尊」の意味は「自ら尊大にかまえること、うぬぼれること」とあり、ますます否定的な意味合いが際立ってくる。これらの説明は、自尊の気持ちを抱く際には他者への謙虚な態度のホウキ^③、むしろ他者の排除といった事態が伴うことを暗に意味している。このような見解は、私たちが素朴に生活の中で身につけてきた「自尊」に対する認識にフゴウするのではないだろうか。そのような「自尊」をもたない自分に対し、むしろ自尊心が高まるという複雑な構図があるのではないか。

自己の価値を認めていても、価値ある自己を表現するよりも、日本において価値を置かれている「謙遜」の表現が優先されることもある。その場合、低い自己評価が表現される。文化的価値をとりこみながら発達するという適応過程の結果として、自尊心が高くならない（示されない）ことも可能性として考えられる。吉田ら（1982）によると、日本の児童では小学3年生くらいから自己卑下的にふるまう行動が観察されており、日本社会では社会化の過程において自己批判や自己卑下が学ばれていたことが指摘されている。

謙遜しながらも肯定的に生きることができるのは、謙遜を美德とする価値の共有があり、その価値を実現している自己への承認を受けられるからであろう。D、相互に謙遜し合う関係において、互いに、自分ではなく他人の価値を認めるやりとりを交換し合うことで、少なくとも人から「否定されない」という人並み感を確認できているのかもしれない。それが「これでよい」という感覚をもたらし、とも考えられる。

E、社会的変化に伴い、日本においてもコミュニケーションの質は変化しつつある。謙遜という価値を共有し合い、互いを牽制しつつも補い合う「世間」（阿部, 1995）の変容とともに、自己観も変容しつつある。実はこのことが、昨今の自尊心昂揚推奨の動きにも大きく関わっていると考えられる。

自尊心の高さは、決して健康な人格と同義ではないし、精神的健康の指標とも同義ではない。それでも、個人の主観的な世界観を肯定的なものにする上では有効といえる。自尊心を高めようという働きかけは、個人が、個人によって個人の世界を肯定的にしうることを願うものである。それは、相互に互いの価値を支援し合ったり、相手の不足を補

い合ったりするかかわり合いが成り立たない状況においても、自身の価値を自ら信じ、自らを自らの寄って立つ基盤とできるようになる心の育成を目指すものといえる。

(中間玲子 『自尊感情の心理学——理解を深める「取扱説明書」』 一部改変)

注 文章中の「(人名, 西暦年)」「人名(西暦年)」…引用した文献・論文の著者名と出版年を表す。

注1 「社会的ワクチン」…一九八六年、アメリカにおいて自尊感情を高める教育的取り組みが行われた。教育をめぐる様々な問題の要因の根幹には自尊感情の欠如があると考えられ、自尊感情は諸問題を解決するための「ワクチン」として注目された。

問一 二重傍線ア〜エの漢字の読みをひらがなで書きなさい。(2×4＝8点)

問二 傍線①〜④のカタカナを漢字に直しなさい。(2×4＝8点)

問三 空欄

 に入る最も適切な語を選び、それぞれ番号で答えなさい。(同じ語は一度しか使えない)

(3×5＝15点)

- 1、ところで
- 2、ただし
- 3、たとえば
- 4、あるいは
- 5、それゆえ
- 6、だが

問四 波線 a 「」を投じる」とあるが、に入る言葉を漢字一字で書きなさい。(5点)

—

を投じる

問五 波線 b 『防衛的悲観主義 (defensive pessimism)』の方略を「自尊心が低い人」に当てはめるとどうなるか。

筆者の考えに基づいて書きなさい。(6点)

自尊心が低い人は

問六 波線 c 「自己への否定的評価は個人の適応を阻害するものとはならない」とあるが、それはどのような場合であると筆者は言っているか。最も適当なものを一つ選んで番号を書きなさい。(6点)

- 1、自分のあり方を否定的に評価することが自分にとって致命的な事態であると理解している場合
- 2、自己を肯定できないことを反省し、自分を改める意思があることを他人に示そうとしている場合
- 3、自分は、自己を否定的に評価することで自らを向上させることができると信じている場合
- 4、自己とは時間的変化を経ることのない静的な実体であると捉えられている場合

問七 筆者は、これまでの日本社会における「自尊感情」のとらえられ方をどのように述べているか。文中の言葉を用いて一〇〇字以内で書きなさい。(10点)

問八 波線d『これでよい』とあるが、その説明をした次の文の(a)(b)(c)に入る言葉の組み合わせで正しいものを一つ選んで番号を書きなさい。(6点)

自己評価の(a)人は(b)することができない自分も含めて、「これでよい」と(c)心性

- | | | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|-------|
| 1、 | a | 低い | b | 肯定 | c | あきらめる |
| 2、 | a | 高い | b | 肯定 | c | 信じる |
| 3、 | a | 高い | b | 否定 | c | 補う |
| 4、 | a | 低い | b | 否定 | c | ふるまう |

問九 次の1～5のうち、本文の内容と合っているものには「○」を、合っていないものには「×」をつけなさい。

(4×5＝20点)

- 1、 この文章でいう「適応的に生きる」とは一般的な社会生活において問題なく生きるということである。
- 2、 自尊感情の高さとは精神的健康の指標であり、個人の主観的な世界観を肯定するものである。
- 3、 自尊感情昂揚推奨により、コミュニケーションの質が変化し、自己観も変容し始めた。
- 4、 日本の児童の低い自己評価はある文化的価値をとりこみながら発達する、社会化への適応過程の結果だ。
- 5、 自尊感情が低い人が自尊感情を高めるようになると、まず、客観的基準で自己否定をし、さらにそんな自分を主観的基準で自己否定する二重否定を体験する。

二

次の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(1×10＝10点)

- | | | | | |
|------|-------|------|------|--------|
| ① 従容 | ② 面構え | ③ 莊重 | ④ 隙間 | ⑤ 出来栄え |
| ⑥ 人垣 | ⑦ 育苗 | ⑧ 蚊帳 | ⑨ 母屋 | ⑩ 頑是ない |

三

次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。(送りがある場合は送りがなも書きなさい)(1×6＝6点)

- | | |
|----------------------|------------------------|
| ① 心臓病をワズ <u>ラウ</u> 。 | ② キョウシヨウな土地 |
| ③ 母はアイビョウウカだ。 | ④ 不正がロテイした。 |
| ⑤ 体をキ <u>タ</u> エル。 | ⑥ ごブサ <u>タ</u> しております。 |